【ポスターセッション】

医療化と自助グループの世界観との矛盾あるいは相克

－自死遺族の会と断酒会の比較事例研究及びアクションリサーチ－

○　上智大学　　岡 知史（会員番号 286）

キーワード３つ：自助グループ、医療化、アクションリサーチ

１．研 究 目 的

医療化とは「非医療的な問題が、通常病気や障害との関連で、医療的な問題として定義され治療されるものとされる過程」(Conrad, 2007, p. 4)である。現代の日本では種々の問題の医療化が推進されている。その日本社会にあって自助グループのメンバーが直面する状況を医療化することが、自助グループがもつ世界観(Kennedy & Humphreys, 1994)の発展をどのように妨げているかを、事例を分析することによって解明し、さらに自助グループの世界観の発展に寄与するアクションリサーチを行うことが、本研究の目的である。

２．研究の視点および方法

研究方法としては maximum variation sampling を使い、二つの自助グループ（自死遺族の会と断酒会）をとりあげ、それを比較事例研究の対象とする。断酒会は半世紀以上もの長い歴史を誇る自助グループであり、医療従事者の協力のもとに発展してきた。「アルコール依存症は病気である」という問題の医療化は、組織のなかでも定着している。しかし断酒の問題を、完全に医療の問題と考えてしまえば、自助グループの存在理由が見えなくなってしまうという矛盾もかかえている。一方、自死遺族の会は結成されて５年以内という会が大半である。グリーフワークや悲嘆回復プロセス論に代表される医療化は、多くの自死遺族の会が拒絶するものであり、精神科医や臨床心理の専門職からは完全に独立した形で発展しようとしている。すなわち、活動の歴史の長短、関連専門職からの協力や連携の有無、医療化の受容の有無という点で大きく違う二つの自助グループであるが、双方とも、現代社会の圧倒的な医療化の流れのなかで、いかに自助グループとしての自らの存在理由を肯定する世界観を打ち出せるかということが、大きな課題となっている。

本研究は、以上のような問題意識をもちつつ、上記の二つの自助グループの活動をエスノグラフィーの手法（参与観察、インタビューおよび文書分析）を用いながら描写することを試みる。また、Klass & Shinners (1982)がかつて提唱した、自助グループの世界観が、自助グループのリーダー層と研究者との対話を通じてより精錬されたものになるというプロセスを目指すアクションリサーチとなっている。

３．倫理的配慮

調査は、参加的アクションリサーチ(PAR)として、調査のプロセスが自助グループのリー

ダー層には常に見える形で進めた。研究対象は個人でなく、自助グループであり、インタビュー等はある程度、生活が落ち着いたリーダー層にのみ行った。数人のリーダーには共同研究者として記名でのかかわりを求めた。しかし組織の矛盾点を語るなど記名での発言が難しい場合は、個人が特定されない形で研究成果を出すこととした。

４．研 究 結 果

断酒会の考え方の医療化は、強調する点が「新生」から「回復」へと変わってきたことに象徴される。しかし「回復」を強調すればするほど、医療で行われているデイケアグループとの違いが、一般の人々には見えにくくなっている。断酒会は会員としての義務や負担ばかりが目立つようになり、それが全国的な会員数の減少につながっていると考えられる。一方、近年では会の多くの新人がアルコール依存症以外の問題ももつようになっており、そのため医療化のモデルの限界も認識されるようになってきた。つまり、医療化のモデルでは「健康だった人が一つの病気になり、その病気が回復することによってまた元の健康な状態に戻る」ということになるが、もともと「健康」だった状態が想定されない人たちや、「病気」が単数ではない人たちには、医療モデルが使えない。そこで断酒会の原点にあった「新生」という考え方が再び注目されつつある。

自死遺族の会の場合は、自死のハイリスク者として自殺対策基本法ではとらえられていた。すなわち自死遺族が「深刻な心理的影響」（自殺対策基本法）を受けた者として支援の対象となっている。そこにすでに医療化がある。遺族の会はそれに強く反発するとともに、自死に伴う社会的問題、経済的問題を強調している。また「悲しみ」については専門家による治療や支援の対象とはせず、「悲しみとともに生きる」として「悲しみ」を受容し、さらに「悲しみは愛しさである」としてそれを肯定的に意味づけしようとしている。

5. 考 察

従来、「医療化」に対しては「社会化」が強調されることが常であった。しかし、アルコール依存症者の場合も、自死遺族の場合も、その困難を社会化することには一定の意義はあるものの限界もある。そこで社会化という方向には重ならず、しかも医療化に対抗できる世界観を構築していく必要がある。

その方策としては二つあるだろう。一つは医療化への批判を世界観のなかに取り入れることである。もう一つは伝統への回帰である。断酒会の場合は、医療化が進む以前に「新生」を核とした世界観があった。そこには日本の伝統的な訓練法と似た要素があった。また自死遺族については、グリーフワークを比較文化の観点から批判した論究が 1980 年代からあり、それを取り入れることによって、その世界観を展開していくことが可能だろう。

※本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「医療化社会での自助集団の世界観の発展と再生:自死遺族と酒害者をめぐる比較事例研究」の助成を受けている。